

## オシドリの人工繁殖について

○多田竜海，大滝侑介  
(横浜市立野毛山動物園)

野毛山動物園では2021年時点でオシドリを雄1羽、雌2羽飼育しているが、これまでこの個体群で交尾は確認されているものの、自然繁殖には至っていなかった。そのため人工繁殖に取り組むことになり、2021年から2023年で合計20卵の人工孵卵と5羽の人工育雛を行い、4羽成育した。

2021年では3卵中1卵介添え孵化させ、残り2卵は初期中止卵だった。孵化した個体は卵黄嚢吸収不全により5日齢で死亡した。2022年ではカモの仲間は放冷終了時、卵に霧吹きを行い急激に冷やすと孵化率が上がるという報告があり、孵卵器内すべての卵の発生を確認してから同じ孵卵器内で霧吹きをする卵としない卵と分けて孵化率に差があるか比較した。すべての卵で後期発生まで確認できていたが発生枠に卵を移した際の温度管理の不手際により、7つの有精卵のうち霧吹きを実施した2つしか孵らず残りは中止卵と死籠りだった。2023年では放冷終了時にすべての卵に霧吹きを行った。入卵していた10個とも孵化2日前まで発生を確認していたが、繁殖制限により2羽のみ孵化させ、他の卵は孵化前に除去した。孵化した2羽は孵化時に介添えをすることもなく指曲がりなどもなかった。

2021年の育雛個体は休息していることが多く、餌付けが不十分のまま死亡したことから、2022年では2日齢から泳げる大きさの水バットを入れて積極的に運動させた。また、嗜好性が高い赤虫を餌付けさせたい餌と同時に与えると水浴びと採食を交互に行い容易に餌付いた。2羽は成鳥まで成育した。2023年も2022年と同様の育雛方法で2羽成育した。

2022年の人工孵卵で孵卵後期に温度管理の不手際があったにもかかわらず、放冷終了時に霧吹きを行った卵は孵化した。すべての卵に霧吹きを吹きかけた2023年でも孵化状態が良かったことから霧吹きを行うことはオシドリの人工孵卵において重要な可能性がある。育雛では2日齢くらいから積極的に運動させることにより採食欲を高められ、指曲がりや翼の下垂などの予防にもなる。また、嗜好性の高い赤虫などの有効活用が早期の餌付けに繋がる。これらを実施することにより、雛の生存率を高めることができると推察される。